【マナーについて】

角田亘（国際医療福祉大学医学部　リハビリテーション医学教室　主任教授）

＊2019 年に某誌に発表したものを、一部改訂した。

私が勤務する病院（国際医療福祉大学市川病院）では、毎月に 1 度、全体朝礼なるものがある。病院に勤務する職員全員が朝から一堂に会して、病院の月間予定や運営状況についての報告を聞く会である。そして、毎回の締めとして管理職クラスの職員が数分間の訓話（もしくは、訓話という名のたわいもない雑談）を話す。副院長を務める私（＊2019 年現在）も、すでにいくつかの訓話を済ませてきた。その中で、比較的職員にウケた（職員の反応が良かった）話をここでご紹介する。マナーのお話である。

ご存じの方もいらっしゃるかと思うが、私は慈恵医大で初期研修を終えた後、10 年間以上にわたって大阪の地で神経内科医として働いた。三重県で生まれ育った私は、関西弁を native なみに話すことはできたのだが、大阪で働き始めた当初は、大阪人の会話のノリに戸惑った。大阪人の多くは、ズケズケと聞きたいことを聞いてきて、聞いてもいないことをペラペラと勝手に教えてくれて、いつの間にかサッサとどこかへ消えてしまう。奥ゆかしくて控えめな県民性を誇る三重県人の私にとっては、大阪人が何気なく繰り広げる痛烈かつ強烈な日々の会話は、衝撃的でもあった。

しかしながら、時間が経つにつれて、この大阪人の会話にもひとつのパターンがあることが分かってきた。例えば病棟の飲み会があり、そこに大勢の医師と看護師が集ったとする。会が進み、今までご縁がなかった大阪人スタッフと打ち解けてくると、たいていの場合、その人はまずこう聞いてくる。「ところで先生、歳、なんぼなん？」。私が正直に自らの年齢を告げると、「へえー、歳の割には顔のシワが少ないな。美容整形行ってはるの？」とか「若いくせにノリの悪さは中年のオッサン並みやな」などと反応される。さらに場が盛り上がると、別の大阪人が私に聞く。「先生、見たところ、ちょっと太めやね。体重はなんぼなん？」。顔を赤らめて私が答えると、彼らは「僕の 1.3 倍や」などと瞬時に私の体重を自分の体重で除してくれたり、「つまりは、0.076 トンやな」とトンに換算してくれたりする。そして、もう少し話が熟すと、「そういえば、先生は、どこの大学を出てはるの？」と来る。「私は慈恵医大の卒業です」と堂々と答えると、彼らは「へえー、それやったら学生時代は毎晩銀座で飲んではったんやな。先生、意外と遊び人やな」と酒を一滴も飲めない私をからかうのであった。そう、彼らとの飲み会における会話では、①年齢を聞く、②体重を聞く、③学歴を聞く、と話が進むのがお決まりのパターンであった。

大阪の場合、このような会話のパターンは、街の中でもだいたいは同じであった。例えば、家の近くの床屋に初めて行った時だ。「今日は暑いでんな」「阪神タイガース、あきまへんな」などと月並みなご挨拶が一通り終わると、生粋の大阪人であったご主人は私に聞いた。「お客さん、若う見えて男前でおますけど、歳、なんぼでっか？」。同じ床屋に 2 度、3 度と通うと、ご主人は「お客さん、前より痩せたんと違いまっか？今の目方（関西弁で体重のこと）はどれくらいでっか？」と私の体重変化に気を留める。ついには「お客さん、いつも賢そうに見えまっけど、どこの学校を出てはるんでっか？」と来る。やっぱり結局は、①年齢、②体重、③学歴だ。

そんな会話に揉まれながら大阪で奮闘していた私であったが、2004 年から念願かない、仕事の舞台を大阪からアメリカの地に移すこととなった。同年の 10 月末に、結婚したばかりの家内とともにカリフォルニア州に渡り、渡米翌日に当地での上司となる Stanford 大学脳卒中センター長の Gregory Albers 教授に初めてお会いした。その時に私は、Albers 教授に真っ先にこう問うた。「Albers 教授、私はアメリカで暮らした経験がありません。アメリカで暮らすに際して、最も気をつけるべきことは何ですか？」。すると、Albers 教授は大変温和な笑顔でこう答えてくれた。「ワタル、それはとても重要な質問だ。では、教えよう。アメリカでは、人に聞いてはならないことが 3 つある。それは、①年齢、②体重、③学歴だ」。

結果として実際に私は、2 年間のアメリカ滞在中に、この 3 つを問われたことは、どこの誰からもたったの 1 度もなかった。2 年間で実に多くのアメリカ人と会話をしたが、この 3 つについて尋ねられたことはゼロであった。確かに、誕生日を祝う言葉をいただいたことはあったが、生まれた年は聞かれなかった。私が安価なハンバーガーの食べ過ぎで太っても、体重の変化量を問われることはなかった。「私は慈恵医大卒です」とアメリカ人の前で胸を張って言ってみたかったのだが、そんな機会は 1 度も訪れなかった。

　アメリカ留学を終えた私は、ほぼ 2 年ぶりに、なじみとなっていた大阪の床屋を訪れた。2 年間のご無沙汰を詫び、アメリカでの経験を簡単に報告した後に、私は床屋のご主人に言った。「ご主人さん、それにしてもアメリカのマナーは素晴らしいよ。絶対に人に①年齢、②体重、③学歴を聞かないんだよ」。するとご主人は、表情ひとつ変えず私の髪の毛をチョキチョキと切り続けながらこう言った。「そやから、ワシはアメリカは苦手ですねん。アイ・ドント・ライク・エングリッシュですわ」。私は、このご主人に代表される大阪人のタフさ加減にあらためて感銘を受けた。それはもはや、憧れにも近い感銘であった。
　お後がよろしいことを祈ります。
（終わり）